

夢の宅配便

1 年学年主任

水野 高代治

リモート授業

先週の金曜日の5校時目に、学年集会を行いました。1年生は、毎月学年集会を開いており、先月の月間目標の反省と来月の月間目標を設定するなどして、学年全体で取り組んでいます。この毎月の学年集会で、給食委員会や環境委員会などの各種専門委員会が、学年の生活の改善点があれば、生活を見直す機会にします。つまり、学年集会は、とても重要な集まりということになります。今は、緊急事態宣言を受けて、集会などの密になる行動は慎まなければなりません。そこで、リモートで各教室のテレビに集会の様子を移して会を進めました。1組の学年委員の秋山君を中心にして、クロームブックを活用して実施しました。

新型コロナウイルスによって、社会は大きく変革を求められていると同時に大きく前進もしていると思います。企業も在宅勤務やリモート会議などコロナ対策で始めた、リモート（ICT）が合理的であり、組織の動きをスムーズに動かす効果が認められるとして注目をしています。学校も、新型コロナウイルスによってクロームブックを生徒全員に配付して、状況に応じて自宅で授業を受ける体制が整ってきました。実際、新型コロナ感染予防から給食をカットしたり自宅で待機している生徒もいます。リモート授業によって自宅でライブの授業を受けて学習権を保障できるようになりました。このように生徒の授業を受ける権利を保障しきれなかった部分が克服されようとしています。とても素晴らしいことだと思います。

大学では、リモート授業は日常で、リモート授業で単位もしっかり取得することができます。さまざまな事情で、学校に登校できない生徒もリモートにより大切な知識や法則などの学問を身につける機会が失われないで済むわけです。私たち教員は、生徒に学問を教えるために教壇に立っています。自分の専門の教科を生徒にしっかり教えることができる事がなによりの喜びであるのです。

新型コロナウイルスの感染防止をきっかけに社会のシステムの一部が変わろうとしています。生徒が大人になって社会で働くときは、リモートは日常的なものとなっているはずです。金曜日の学年集会の時に、すでに生徒はリモートの文化を受け入れていることを実感しました。出席できない生徒も家で授業を受けられる環境まで高めていかなくてはと思いました。私たち教員は、たとえ生徒がどんな環境に置かれても、勉強を教えることを放棄することがあってはならないと思います。生徒がそこにいる限り、教師は生徒に学問を教え、関わりつづける使命があることをいつも肝に銘じておきたいです。そしてもっと、もっと私たち教師に力を神が与えてくれることを祈る毎日です。

明日の授業変更

- | | | | |
|-----|------|-------|------------|
| 1 組 | 3 校時 | 理科が家庭 | |
| 2 組 | 4 校時 | 国語が英語 | 5 校時 理科が家庭 |
| 3 組 | 3 校時 | 国語が数学 | |

第5話…魔法の包み紙！

青柳先生に、包み紙の新聞紙を見てほしかった。お弁当を一人で食べようと裏庭でお弁当を包んでいる新聞紙を広げたら、新聞紙に母からのメッセージがマジックで書かれていた。

おにぎり、おいしいかな？
お母ちゃん、いっしょうけんめいに、にぎりました。
喜代治の大好きな赤ウインナーと塩むすびです。お母ちゃんのおにぎり食べて、午後もいい子でがんばってくださいね。
夜に、運動会の話を聞くのを楽しみにしてます。
やさしい喜代治へ
おかあちゃんより

うれしくて、うれしくて、涙がこぼれそうになった。どうしても、どうしても、青柳先生に見せたかった。なんだかわからないけど、手紙を先生に見せたかった。いや見てほしかった。本部席に息を切らして行くと、来賓の方々とPTAの会長さんと校長先生や先生方が楽しそうに用務員の先生が配るお弁当を食べていた。「あら、喜代治君、もうお弁当食べたの？」と優しい顔で青柳先生が声をかけてきた。「まだ食べていません。裏庭で食べようと思ったけどこんな大きな蛇がでて、怖くなって逃げてきました。先生の横で食べただめですか？」と蛇とか調子のよい嘘を言ってお願ひしてみた。「そうなのね。喜代治君、本部席は生徒は入ってはいけないのよ。一緒に食べてあげたいけど、本部席に喜代治君の座るところはないですよ。」と言われてしまった。「今日はどうしても先生と食べたいのに、一緒に食べたいのに。」と私が目を赤くして言うと、「青柳先生、喜代治君と一緒に食べたいと言っているのだから横に座らしてあげなさい。」と津田教頭先生が言ってくれた。教頭先生と青柳先生に挟まれて座って、お弁当を食べることになった。先生方のお弁当は、赤飯だった。風呂敷を開けて、そっとお弁当を机の上に置いて、「いただきます。」とわざと大きな声で言いながら、お弁当を包んでいる新聞紙を広げた。「あれ、喜代治君、新聞紙がお手紙になってるわ。お母さんからの手紙ね」青柳先生と津田教頭先生が手紙を呼んでくれた。「喜代治君、良かったね。喜代治君のお母さんはとっても優しいお母さんですね。喜代治君、頑張らないとね！」と青柳先生が私の肩をポンポンと叩いてくれた。津田教頭先生が「喜代治君、午後は、この新聞をもって本部から教頭先生がお母さんに代わって、応援するぞ！」と励ましてくれた。先生がこんなに優しいとは思わなかった。本部席で、いつも怒られている先生方にも「喜代治君、最後まででしっかりね！」「午後は、地区別対抗リレーの応援をしっかり！」「閉会式もちゃんと出るんだぞ！」と言葉をかけられた。午後の種目は、小田原小唄を踊って、そして運動会で一番盛り上がる地区別対抗リレーだ。1年生の女男、2年生の女男、と順番につないで最後に6年生の女男とバトンを受け渡してゴールとなる。地区ごとの代表で競うので、保護者も応援に熱が入る。私の地区は、鬼柳地区で毎年、上曽我と接戦になるが、一位でゴールしている。各学年の俊足が鬼柳地区にはそろっているのだ。今年は、リレーの応援をしっかりと、閉会式もしっかりしておにぎりを食べながら誓った。

おにぎりが食べ終わり青柳先生と教頭先生にお礼を言って、本部席から離れようとしたときに、鬼柳地区担当の古谷先生に声をかけられた。学校で一番生徒から恐れられている男の先生である。「喜代治！ちょっと。」この先生は、生徒を呼び捨てにする。「午後の地区別対抗リレーなんだけれども、鬼柳4年生代表の正明がこの弁当の時間に転んでねん挫した。代わりに喜代治に出てもらおう！」「エーっ！リレーですか！」私は、古谷先生の突然の話に頭が真っ白になった。 つづく